

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390500043		
法人名	株式会社 アメニティサービス社		
事業所名	グループホーム あいあい		
所在地	岡山県笠岡市白石島455番地		
自己評価作成日	平成24年12月24日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaikokensaku.in/33/index.php?action=kouhvu_detail_2010_022_kani=true&amp;JivovsvCd=3390500043-00&amp;PrefCd=33&amp;VersionCd=022">http://www.kaikokensaku.in/33/index.php?action=kouhvu_detail_2010_022_kani=true&amp;JivovsvCd=3390500043-00&amp;PrefCd=33&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社ハートバード		
所在地	岡山県倉敷市阿知1-7-2-803 倉敷市くらしきベンチャーオフィス7号室		
訪問調査日	平成25年1月17日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

所在地が瀬戸内海の島にあり海に囲まれています。当施設の玄関を開けると目の前に海水浴場が広がり、夏の喧騒、秋の静寂、冬の荒海等季節や時間により海は様々な顔を見せてくれます。その中でゆっくりと時間を過ごしていただき、今までの生活環境を考慮しながら徐々に生活習慣をつけていただいています。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「ちょっと賑やかな我が家へようこそ。」そんな雰囲気が漂うのは、ここが元旅館だったというだけでなく、利用者が気兼ねせず、自分の家のように気ままに伸び伸びと生活しているからである。家族アンケートの満足度が高い理由がわかった。廊下を何度往復しても、それがその人のやりたいことであれば、職員は口を出さない。食事のあとは、そのままこたつでござる寝しても、だれもとがめない。かと言って決して放任しているわけではない。1階と2階に分かれた、目の行き届きにくい構造であるにもかかわらず、利用者の安全面や健康面に注意を払いつつ、職員のだれかが常に見守っている。皆の努力で経営理念にある「ゆっくりのんびり」が具現化していた。祝い事などの食事は、豪勢な食器に盛り付けて見た目の趣向も凝らし、旅館だったこぞできるハレの日の演出などを、うまくケアの場面でも取り入れている。今では島で唯一のグループホームとして、島民にとっての生活相談の窓口にもなっている。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践に近づけている	事あるごとに話し合いスタッフ全員が自覚し、実践できるようにしている。	理念の「愛にあふれたおもてなしの心を大切に、ゆっくりのんびり過ごしていただく」を玄関ホール等に掲げている。焦って走り回ったり、利用者の自尊心を傷つけるような職員の行動には、管理者がその場で注意する。必要に応じてみんなで話し合い、常に基本に戻ることを大切にしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自然な形で交流できている。	ほぼすべての島民が元々の旅館名を知っていて、一人で歩いている利用者を見かければ、事業所に連絡してくれる。民生委員からの独居高齢者や認知症の相談に気軽にのり、島の高齢者相談窓口のような存在になっている。消防団に入っている職員もいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	積極的な取り組みはしていないが、相談をもちかけられれば、丁寧に対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をもとにサービス向上に活かしている	回数は目標に達していないが、できている。	運営推進会議は年2回程度の開催だが、住民、医師、地域施設管理者など様々な人が集う。必ず利用者と同じ昼食を出し、打ち解けた雰囲気の中で話し、普段の様子を見てもらう。回を重ねるごとに認知症や事業所での介護への理解が確実に深まってきた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	積極的に取り組んでいる。	市の職員とは何でも相談しやすい関係で、運営推進会議にも参加している。利用者に生活保護受給者がいるので、この面でも連絡を取り合っている。地域包括支援センターからは独居高齢者の相談があり、入居につながったこともある。またセンター主催の研修に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を発足し、研修を行い取り組んでいる。	身体拘束は見受けられない。利用者は事業所内を自由に行き来し、のびのびと過ごしている。玄関の施錠はなく、夏場は網戸にしている。身体拘束対策委員会が年2回、何が拘束に当たるのかや、言葉による拘束などを研修し、注意を促している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	スタッフ全員が常に注意を払い防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	行っている。	話しやすく、行きやすく、要望に対応してくれる事業所と感じる家族が多い。足を骨折し、リビングまで来づらくなった利用者の居室に、事業所のこたつを入れるなど、積極的に利用者の様子や言動から要望を察して叶えようとしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	問題が起こるとミーティングを行い意見や提案を活かせるよう取り組んでいる。	問題が起きると、すぐに話し合い、解決に向けて、代表者や管理者が職員を交えて、活発に意見を交換する。例えば、利用者ごとに食事の量や味付けを変えてみたり、手すりの取り付けや居室へのポータブルトイレ設置などが実現した。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	積極的に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	スタッフ全員が常に連携を取りながら努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者本人の出来る事を見極め協力し合うように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	努めている。	島の外に出るのは難しいため、遠方に住む家族にも、可能な限り来訪してほしいとお願いをしている。ほぼ毎日通って来る家族もいる。祭りの時期には島の踊りを練習したり、夏場は外の海水浴場の様子が見えるよう、玄関に椅子を並べるなど、島の生活を味わってもらっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	スタッフ全員で定期的に意見交換し努めている。	廊下を這う人、行き来する人、作業を手伝う人、一人で居室にいる人を見かけた。利用者の様子は申し送りや連絡ノートで共有し、職員間で話し合い、危険や他人への迷惑がない限り、各人の意思を最大限尊重して好みに暮らせるよう配慮している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	十分話し合い作成している。	3か月ごとのモニタリングと、本人、家族、職員からの意見を基に、本人が安心して笑顔で毎日生活できるように重点を置いた介護計画を立てている。計画は長くても1年とし、3ヶ月ごとに見直すこともある。	職員が日々の介護において介護計画を意識した対応ができるよう、また、ひな形や書き方を工夫して、計画を実施したかどうか分かる記録づけを期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	努力しなければならない分野である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	島の診療所の医師が2週間に一度往診に来てくださる。	すべての利用者が島の診療所をかかりつけ医とし、家族も医師を信頼している。診察時は必ず訪問看護の記録を参考にしてもらう。医師が病院での受診が必要と判断し、家族が付き添えない場合は、職員が本土の病院まで付き添っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションから1週間に一度看護師の訪問がある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	取り組んでいる。	この1年間に3名の看取りをした。医師も看護師も住み慣れた場で自然な最期を迎えることに肯定的で、24時間連絡の取れる体制である。本人・家族へは契約時に書面を渡して説明し、状態が悪化した際には話し合い、同意書を得ている。また、管理者は職員の精神的負担にも気遣っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な訓練は、出来ていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	築いている。	数年前に隣の建物が全焼した火事があり、万一の時には近隣住民で組織した消防団が短時間で駆けつけられる体制がある。職員の中にも団員がいる。建物内はスプリンクラーが完備され、外には消火栓がある。家具は突っ張り棒で固定され、津波の際の避難場所も決めている。	消火器がものに隠れてわかりにくかったり、職員もその位置をきちんと認識していなかったため、主に火災時の対応を、手順や役割を明確化して職員に知らせ、行動が起こせるよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	努めている。	旅館時代から続く、相手を最高レベルの人として接する心構えが引き継がれ、利用者を「ちゃん」付けで呼ぶような職員の接し方には、管理者が注意している。紙パンツに抵抗がある人には、本人の自尊心を傷つけぬように特に注意を払っている。	何度か大きめの声で「おっこ出ました？」と呼び掛けるのが聞こえた。一方で周りに気づかれぬような気遣いでトイレ誘導する職員もいたので、どの職員も一定レベルの接遇ができるよう、期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	スタッフの一人が美容師の資格を持っているので定期的にかットしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	行っている。	ほとんどの利用者が残さずに食べていた。一部の利用者が楽しそうに下ごしらえを手伝っていた。検食を兼ね、職員も同じものを食べる。島という環境から外食ができないので、折に触れて旅館時代の特別な食器に盛り付けたり、変わった食材で雰囲気盛り上げている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後ではないが、行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	行っている。	十分な数のトイレは、どこもきれいに掃除され、ずっきりしている。各利用者に応じた言葉がけや介助で、トイレでの排泄を支援している。しかし「漏らすかも」という不安を増やすより、パッドなどの活用で安心した時間を過ごせることに重点を置いている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の方が多いので粉末のファイバーを使用したり、毎朝ヨーグルトを食べてもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	ある程度は予定を立てているが、柔軟な対応が出来るように努めている。	平均週1~2回の入浴だが、もともとあまり入らない人が多く、それまでの生活と同程度の回数を維持している。入浴の無理強いはしなく、衛生面に配慮しつつも、清拭に変えたり、取りやめたりする。自分の好きなシャンプーを持ち込んだり、入浴剤を入れたりして、寛いもらう。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	努力が求められる分野でもある。	気候が良ければ、外に出て海を見ながら風に当たったり、近くの船着き場まで一緒に散歩する。職員数が足りていれば日暮れまで対応する。神社を参拝したい利用者は車で送迎している。島外に出かけるのは難しいが、年1回の花見は恒例行事になっている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持している方もおられるが、使う機会はほとんどないが、現状です。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	行っている。	夏場は海水浴場に面した玄関ホールを開け放ち、椅子を置くと、そこが社交場となる。冬は2階の和室が社交場で、こたつ2つと机を配置している。職員は掃除をするごとにチェック表に名前を書くことで、清潔が保てるようにしている。廊下に貼った大きな写真は、話題作りに貢献している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	行っている。	居室は元旅館の客室を流用した、全室畳敷きの和室である。どうすれば住みやすい部屋になるかを検討し、利用者の生活に応じて、鏡台、こたつ、ポータブルトイレを貸し出している。ベッドは基本的に利用者側で用意する。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	行っている。		